



里原遺跡水田址

埋蔵文化財発掘調査報告書

1984.1

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

里原遺跡 水田址発掘調査報告

I 里原遺跡の環境

里原遺跡は長野県下伊那郡喬木村阿島里原に所在し、水田址発見・調査地点は喬木村 1196 番地である。

北を加々須川、南に小川川が天竜川に注ぐ中間地点に阿島大橋があり、この橋より東 500 m を中心に南北 250 m、東西 100 ~ 150 m の範囲に広がる遺跡で、天竜川氾濫原の水田地帯に接した最低位冲積段丘面にあり、標高 404 ~ 410 m、天竜川との比高差 3 ~ 8 m である。東は冲積上位段丘面が備かにあって比高差 70 ~ 75 m の帰牛原段丘崖がせまっている。段丘崖は帰牛原段丘面となり、さらに東は伊那層よりなる丘陵が高まって続いている。帰牛原西面段丘崖の南寄りに崖端浸蝕による唐沢の谷が深くえぐりこんでいる。

微地形をみると、遺跡の南半分は唐沢の浸蝕谷による土石流の堆積が 80 cm 以上の深さに埋め、このため段丘面は緩い傾斜地形をなしている。

水田址発見個所は遺跡の中央の最西端部にあり、比高 2 m の傾斜をもって天竜川氾濫原の水田に接する。図 3 の北側西端部土層断面図にみると耕土 20 cm 余、その下は 80 cm 前後の砂礫の堆積があり、15 cm 前後の粘質灰褐色土層があって粘質黑色土となり、その下部が水田地面となり、湿地帯となっている。

里原遺跡で採集された遺物をみると、縄文時代では中期勝板式、後期堀ノ内式・加曾利 B 式、晩期水神平式類型土器と石器類があり、弥生時代後期土器・磨石鐵・石鏡等、古墳時代では土師器の出土をみている。水田址南東 150 m に里原 1 号・2 号古墳があり、1 号墳（大塚）よりは四神四獸鏡・砥石他の出土をみ、喬木村重要文化財に指定されている。

周辺低地段丘面の遺跡をみると、加々須川北の阿島遺跡は弥生中期前半阿島式土器の標準遺跡であり、弥生中・後期、古墳時代から平安・中世にわたる遺物の出土が多い。加々須川南岸の郭遺跡では縄文中期後半住居址 5 軒と弥生中期の遺構が確認され、後期堀之内式土器片の多くも出土している。加々須川南岸では古い土師器の出土をみており、小川馬場平遺跡では縄文前期末から、中・後期、弥生中・後期、古墳時代の遺物の多くが中学校建設時に出土している。帰牛原段丘崖の上には帰牛原遺跡群があり、縄文時代中・後期、弥生中・後期の集落址と弥生後期の方形周溝墓群によって注目されている。

加々須川・小川川の間にある低位段丘面の古墳には北に竜東地区唯一の前方後円墳郭 1 号があり、その南に消滅しているが鉄器類の多くと須恵器の出土をみた郭 2 号墳、加々須川南に未登録であるが町古墳がある、ここから 6 世紀前半の須恵器高杯の出土をみている。阿島の町中には町弁天（花立）古墳があり、その南の一段高い面に杉立古墳が残存している。里原の南東の一段高位面の馬場平には里原 3 号・4 号古墳が存在していたが、消滅されている。

この地域における天竜川沿岸低位段丘面の発掘調査は阿島遺跡の一部調査と郭遺跡の保育園・公民館建



図 1 里原遺跡地形・水田址位置図及び
周辺主要遺跡 (1 : 50,000)
0 水田址、1 里原遺跡・1・2号墳、2 阿島遺跡、
3 郭遺跡・郭 1・2 号墳、4 加々須川南遺跡町
古墳、5 町弁天古墳、6 村立古墳、7 帰牛原遺
跡群、8 馬場平遺跡・里原 3・4 号、9 伊久間
遺跡群

設時の立合調査のみで、表探遺物・耕作時出土遺物のみによるもので、遺跡についてはその一端を知るのみである。

II 調査経過

里原遺跡の西端部天竜川氾濫原に接する地帯 1.6 ha を耕作転換特別対策事業里原地区が、喬木村昭和58年度事業に計上された。計画区域は遺跡の中心部から離れており、耕作者の言によれば、耕土下は深い礫層となっているとのことである。しかし、村教育委員会は事前調査の必要の有無のため、6月7日佐藤立合で遺物の散布をみると無く、数箇所にピット調査するが表土下 25~40 cm で厚い礫層となっていることが確かめられ、畠牛原段丘崖を切る唐沢の浸蝕谷による土石流の堆積と認められた。このため工事中の立合調査をなすことに決めた。

9月中旬、一部工事に着工。9月18日今村善興氏により最下段面の氾濫原に接する傾斜地の削平部に水田址とみる遺構が発見され、教委に報告があり、翌19日佐藤が現地をみ、東西方向の2条対となる杭列を確認した。重機による北側の切採り断面は地表下 40 cm 前後黒土層、次いで 80~120 cm の伊那層の砂礫堆積があり、下層は黒土層となり、その下部に杭列がみられる。このため村教育委員会に至急調査の必要を要請した。

9月21日（くもり・時々小雨） 水田址とみる一帯は水が溜り、調査不能のため午後より排水作業を行ない、ある程度乾くのを待って調査にかかるにした。

9月23日以後連日の雨となり、28日は台風10号による大災害となり、調査はしばらくの間手のつかぬ状態となった。

10月8日（はれ） 調査にかかる。北側に僅かに残る断面切採り面の調査。東側の杭列調査、西側はかつての土石流の堆積で深く埋まり、遺構は破壊されていた。

18日（はれ） 調査可能範囲の杭列の調査を終え、測量・写真撮影をなす。

19日（くもり・午後雨） 午前、杭列間の下部断面調査をなし、調査を打ち切る。

これまでの間、南側の新たに開始された工事区域の立合調査をなすが、遺構の発見はなかった。

III 遺構・遺物

調査面積は段丘先端部を削平した限られた範囲である。9月28日の台風10号による豪雨のため削りとられた北と東の断面は、北西端の一部を残すのみで崩され、北側は用地外、東側は農道の土盛部となっており、その崩れも甚しく、断面調査は図3の断面図にみるのみである。水田址遺構は地表下 130 cm にある。地表下 20~25 cm の砂質黒色土（耕上）、その下は 85 cm 余の段丘崖崩落の砂礫層が覆い、西端の傾斜面は砂層によって埋まっている。砂礫層の下には小渋川氾濫泥の堆積の粘質灰褐色土が 15 cm 前後あって粘質黒色土層となる。この黒色土層は 40 cm 前後の厚さをもち、その中程の深さに水田址面がみられた。粘質黒色土層は水はけが悪く、湿地帯をなしている。この層の下は 15 cm 前後の白砂粒を含む黒色土層があつて天竜砂の層となり、かつては天竜川の河原であったことを示している。（図4）

水田址遺構は中央部に北西から南東にかけて 18 m にわたり、幅 50~70 cm の 20 cm 前後間隔に打ち込む 2 条に並ぶ杭列があり、北西隅で北東に折れて続くが、西側の 1 列は氾濫押し出しによって崩され、残る 1 列は用地外へと延びている。南東側では 1 段（50~60 cm）高まり、幅 90 cm と広くなり、深い砂礫層下へと続き、また、段を上がる地点で北へ折れる杭列がみられ、砂礫層下へと入っており、調査不能であった。こ

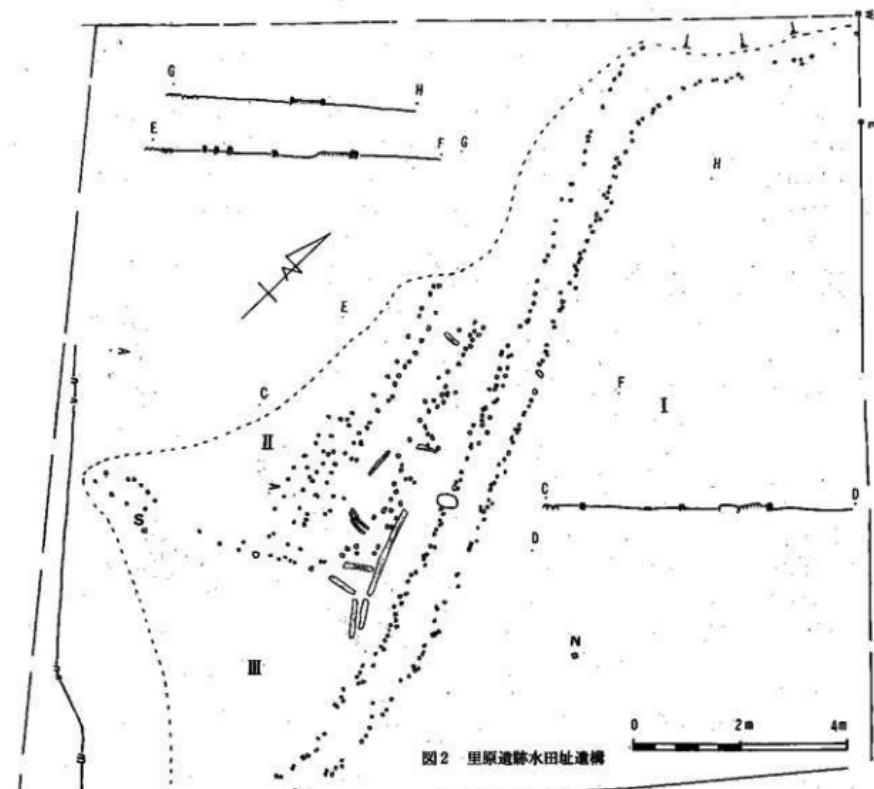


図2 里原遺跡水田址遺構

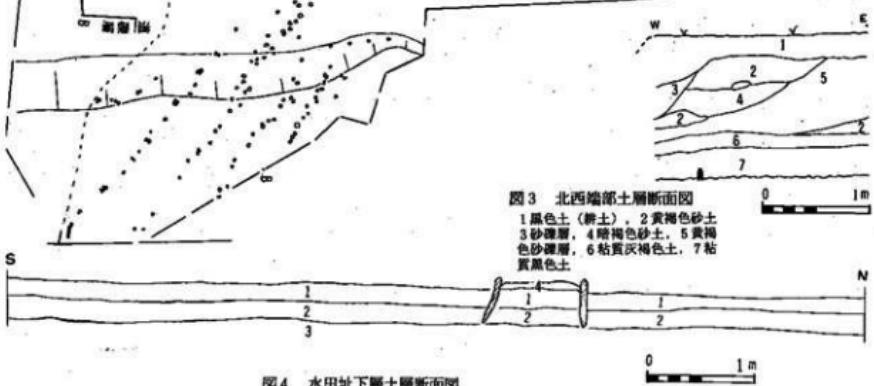


図3 北西端部土層断面図

1 黒色土(耕土), 2 黄褐色砂土
3 砂礫層, 4 暗褐色砂土, 5 黄褐色砂礫層, 6 粘質灰褐色土, 7 粘質黑色土

図4 水田址下層土層断面図

1 粘質黒色土, 2 粘質黑色土(白砂粒を含む),
3 白砂(天竜砂), 4 砂利の固め

の杭列間は砂・砂利によって固められ、田の区画をなすとともに畦道をなしている。

この中央杭列にはほぼ平行して南西側に3組の杭列が並ぶ。幅30cm前後の間をもつ2条の杭列よりなり、杭間隔は20cm内外であるが、間を失ったものが多くみられる。北西6mで砂礫の堆積となり、南東側では南西側に折れ、延びるが5mで砂礫の堆積で埋まる。

水田址の区画を杭列から推定すると、I・II・IIIがある。Iは比較的安定した保存にあり、IIは杭列からみて2~3回の作り替えが予想され、IIIの区画は小面積とみられる。Iに対してII・IIIの面は確かに低く、杭も細く、中央杭列に比し古いとみる。3区画とも、用地外または段丘崖崩落の伊那層の砂礫に大半は埋められている。中央部にみる数点の木片は小渋川泥堆積の下にあるが、その堆積時の氾濫の流入物とみたい。

遺物(図5・6・7) 水田址に直接結ばるものは杭のみである。砂礫層中出土には図5の3~6の他多くの陶片がある。3は東濃系とみられ、4は富田焼。5・6は小川焼のスリ鉢でいずれも江戸時代後期後半のものであり、里原地籍の櫻牛原段丘崖崩落による家屋の流失によるものとみられる。江戸時代の喬木村の災害史(喬木村誌による)によると、正徳5年(1715)の未満水、寛政元年(1789)の洪水、文政11年(1828)の子の満水等の大災害に見舞われている。水田址のすぐ北東に墓地があり、その家の言伝えによると、200年前の災害に基が埋り、掘り出し高くしたとのことである。

砂礫層下の小渋川泥堆積の堆積は天竜川氾濫によるもので、その堆積の時期は不明である。この堆積の最下部出土が図5の2の土師器の小皿一かわらけである。11世紀末から12世紀前半のものであり、口縁部の磨滅が強くみられる。II水田址面の黒色土層出土に1の有扶石器がある。頭部は厚く大きく、刃部が小さく、刃はするどい。硬砂岩製の工具で、重量225g、弥生中期前半にみる石器であるが、水田址の関連ははっきりしない。I水田址の下部から弥生式土器とみられる小片の出土をしている。

木器(図6の1~3) 水田址面上部に出土し、1は3か所にノミによる抉りをもつ。2・3は板状の木片で、いずれも桧材、何であるかは不明であり、天竜川氾濫の流入物とみたい。

杭(図6の4~6・図7) 重機による傾斜面切採りの際、掘り出された11本を採集してきたものである。栗材を使用し、割り、先端を鉄器によって削ったものである。最長は90cm、最短31cmの各1本の他は38cmから62cmあり、平均50cmの長さ。幅は最短のものが3cmと他に4cmが1本ある他は6~7cmあり。形成層部をもつものにやや破損がみられる以外、保存は良好である。図6の7は南西に分かれる杭列のものであり、他は南東の上段面の杭列のものとみられる。

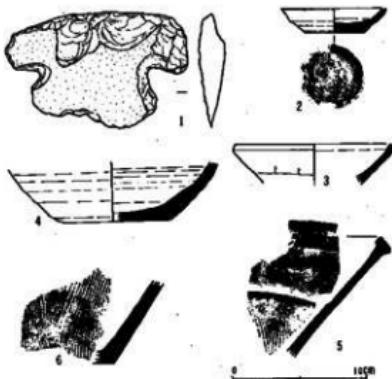


図5 里原遺跡水田址出土遺物(1:4)

1…水田址内、2…水田址砂礫層、3~6…砂礫層

圖6 延原遺跡水田出土木器·杖 (1:4)

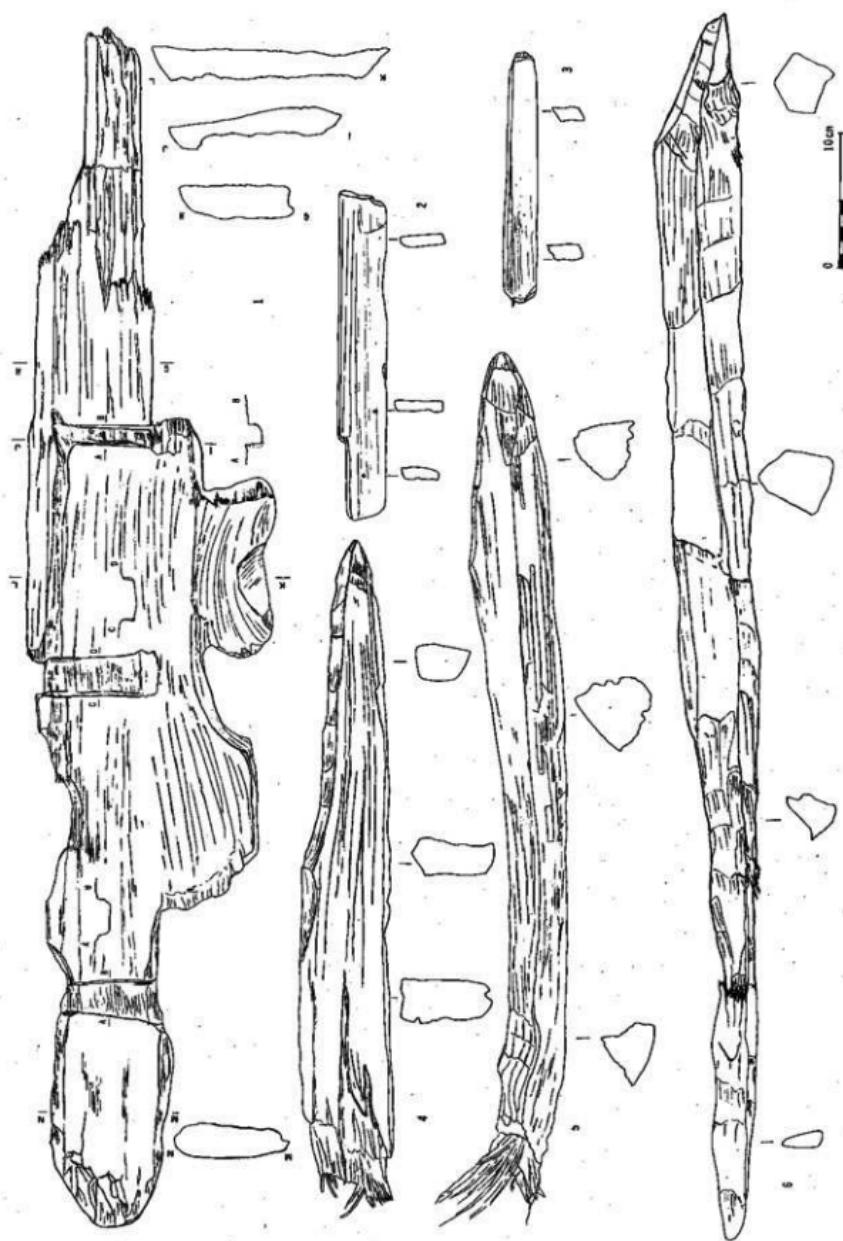
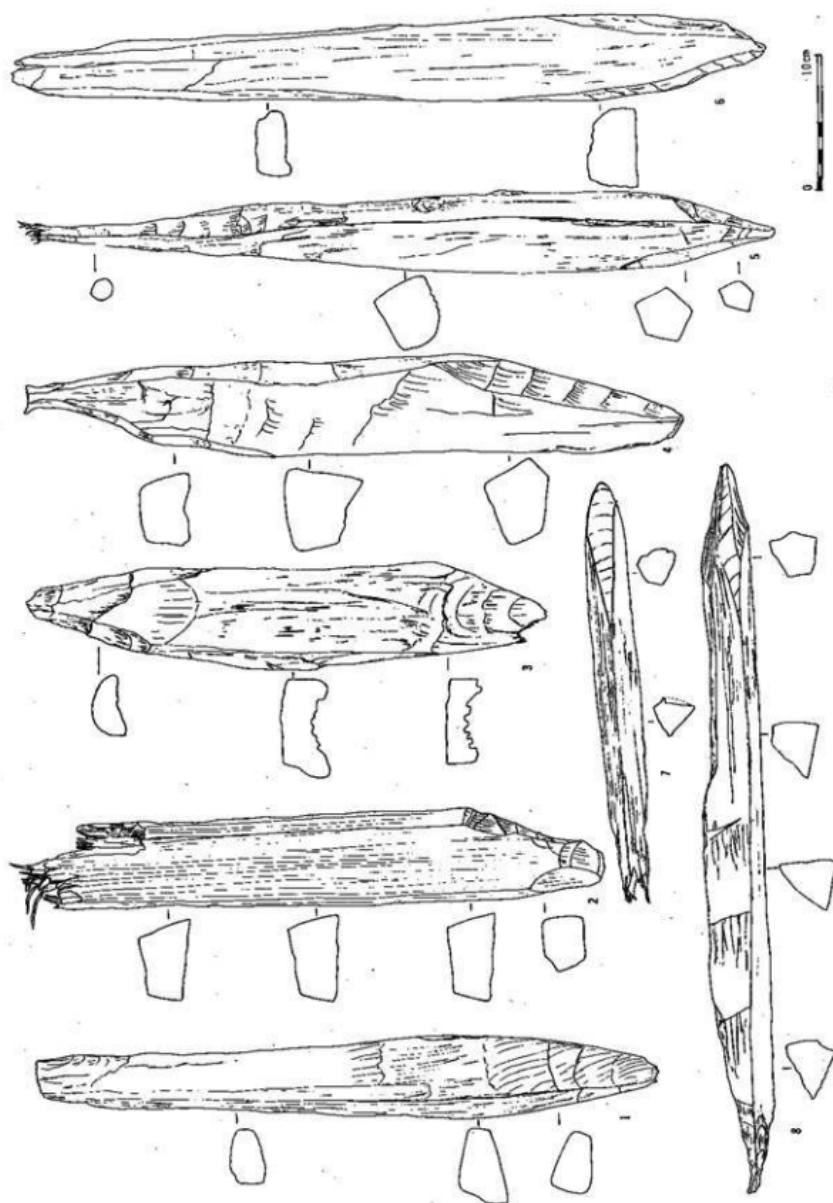


圖 7 墓原遺物水田地板 (1 : 4)



IV ま と め

水田址の時期について十分な決め手となるものはない。段丘崖崩落による砂礫層の堆積は喬木村災害史にみる1715年の未溝水以後であり、この砂礫層中に含まれる江戸後期後半の陶器片と時期を同じくする。下層の粘質灰褐色土層一天竜川氾濫による小渋川泥の堆積中には中世以降の遺物ではなく、粘質黒色土上部に平安末期の土師器の出土をみている。天竜川氾濫堆積の時期は、おそらく平安末期から中世初頭であったと予想される。

杭の鋭利な削りは鉄器の使用が広まった時期のものであり、弥生時代の遺物の出土をみているが、平安時代に造成された水田址とみるが妥当と思われる。

周辺の天竜川に面す低位段丘面の古墳の存在が既に杭列による畦を作ったとも思われるが、十分な解答は得られない。また弥生時代中期からこの湿地帯を利用した稻作が行われたものと出土遺物、周辺の遺跡からみて推測される。

水田址造構は、上に厚く砂を覆い、さらに耕土を盛り完全に保存されるよう配慮された。将来にわたって遺跡の保護がなされるよう念願される。

工事請負業者の理解・協力があり、調査にたずさわれた方々の熱心な作業態度のあったことを深謝したい。

(佐藤 駿信)

発掘調査参加者

喬木村教育委員会

下岡輝男(教育長) 講釣和男 永井宗寿

発掘調査担当者

佐藤 駿信

作業員

福島明夫

大島利夫

今村春一

向田一雄

吉川正美

松下真幸

測量・製図

田口 さなゑ

印刷 株式会社 秀文社



水田址中央部の杭列



水田址を北からみる



水田址の杭列



水田址南東側は段をなして上がる。



発堀スナップ



里原遺跡水田址全景 北西より



里原遺跡水田址全景 南東より

